慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	相互行為の秩序が帰結するもの : ゴフマンを手がかりにして
Sub Title	How does the interaction order effect our social life? : from the perspective of Erving Goffman
Author	櫻井, 龍彦(Sakurai, Tatsuhiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1999
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.4 (1999.) ,p.94- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19990000-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第4号（1999）

相互行為の秩序が帰結するもの

——ゴフマンを手がかりにして——

How Does the Interaction Order Effect Our Social Life? : From the Perspective of Erving Goffman

櫻井　龍彦

1. はじめに

社会学の歴史を通して、「行為」の概念が中心的な研究対象の一つとして扱われ続けていることを否定する者は一人もいないであろう。ある意味で社会学の歴史は、よりよく行為を理解するための概念や理論の整備の過程であった、とも言えるかもしれない。

ところで、我々は常に身体として存在している以上、我々が行うあらゆる行為は、常に身体的な活動としてなされるものである。つまり行為というものは、必然的に「いま・ここ」という時—空間的な位相のもとに展開されるものであり、しかも多くの場合、他者との協同のもとになされるものである。

そのように考えてみるならば、「いま・ここ」という時—空間的な場において、他者との物理的な近接のもとに展開される行為や関係のあり方、すなわち「対面的相互行為(face-to-face interaction)」という領域は、社会学的な見地からしても、また、日常生活者としての我々自身の社会生活にとっても、極めて重要な領域であると言わなければならない。そして、こうした相互行為という関係性の考察に際して見逃すことができないのが、アーヴィング・ゴフマンである。

以上のような問題意識のもと、本稿では、ゴフマンの相互行為論について検討する。主な論点は以下の二つである。第一に、議論が抽象的で分かりにくいというような意味において難解ではないにしても、様々な概念やトピックが交錯し、なかなか全体像が見えにくいと言われるゴフマンの議論を整理し、一貫した図式を抽出する。無論これは私自身の研究関心に引きつけた上でのものであるから、そうした意味では公平さを欠く部分もあるかもしれないが、ゴフマン独特の文体と議論の複雑さに振り回されずにゴフマンを受容するためには不可欠の作業である。第二に、そうした作業と絡める形で、相互行為という経験が我々の社会生活に何を帰結しているのかを考察する。

したがって本稿は、ゴフマンが議論の引き合いに出しているような様々な興味深い具体的事例などは捨象して、彼の理論の骨格を抽出したものである。こうした作業は、ゴフマン社会学独特の「面白さ」をかえって損なってしまっているかもしれない。しかしそれと

引き替えに本稿は、ゴフマン社会学の全体像と、我々の日常的な相互行為を展望するための一つの枠組みを提示することを目的とする。

2. ゴフマン社会学は何を問題にしているのか

先ほども述べたように、対面的相互行為――これをゴフマンは「状況(situation)」や「共在(co-presence)」などとも呼ぶ――の研究に際して、ゴフマンの業績を無視することはできない。しかし対面的相互行為の研究は、ゴフマンの独占領域であるわけでもなければ、ゴフマンの登場をもってはじめて開始されたというようなものでもない。例えば、群衆の研究などは社会学の草創期から開始されていたと言えるであろう。では、ゴフマンは対面的相互行為の研究に際して何を問題としているのか。そしてゴフマンの研究の重要性とオリジナリティとは何であろうか。まずこうした点を確認することから考察を始めよう。

ゴフマンによれば、従来の相互行為研究においては、基本的に暴徒の集団と化したり、パニックに陥ったりなどした相互行為場面に力点が置かれていたという(Goffman,1961a→1972:7=1985:i)。つまり従来の社会学においては、ジンメルやシュッツなどの業績[1])の一部を例外とすれば、対面的相互行為の非日常的な側面についての考察が中心になっていたのである。そこでゴフマンは、「ごく普通の人間交流、あるいは日常生活における社会的接触のパターン」(Goffman,1963a:4=1980:4)、すなわち対面的相互行為の秩序の構造についての考察の必要性を訴える。したがって、「相互行為の秩序」――これはゴフマンのアメリカ社会学会の会長就任演説のタイトルにもなっている――こそが、ゴフマンが最も重視する研究対象である。

更に、対面的相互行為を、その外部と切り離されある程度独立した、それ独自の論理によって形成される自律的なシステム、すなわち「状況システム(situation system)」として対象化したところに、ゴフマンの研究スタイルのもう一つの大きな特徴がある。そのような対象化の仕方の根拠となるのが、対面的関係性がもつ独特の特質である。対面的な関係性というものを一言で定義すれば、それは「視界の相互性による共在」とでも言うべきものであり、したがってこうした共在関係において人々は、相互に相手を「ナマの感覚」によって直接的に知覚し合っている。このような、人々が「各自が行っていることが相手に知覚されるほどに、また知覚されているという感覚が知覚されるほどに」(Goffman, 1963a:17=1980:19)近接している相互行為という場においては、「我々は行為の主体としてはっきりと見られていて、行為の事実を否認する機会はほとんどない」(Goffman, 1963a:16=1980:18)のである。大まかに言って以上が、対面的関係性というものに付随する、非対面的な関係性とは異なった大きな特徴である。

ここで少し議論を整理しておこう。ゴフマンが対象にしたものとは対面的相互行為の秩序の問題であり、しかもゴフマンは、対面的関係性が持つ成員たちの直接的相互知覚という特質に考察の焦点を当てている。端的に言えば、こうした点がゴフマンの重要性とオリ

ジナリティなのである。

3．状況適合性の規則

対面的な状況は視界の相互性による共在であり、その内部での行動はすべて、成員の相互知覚のもとに置かれている。こうした知覚上の相互浸透という現象が、他の関係性には見られない、対面的関係性独特の重要な特徴である。そして対面的状況というものが、このような独特の性質を持つものであるならば、対面的状況内での行動やその秩序も、ある独特の規則によるものであると考えなければならない。そうした規則をゴフマンは「状況適合性の規則(rule of situational propriety)」として考察していくことになる。

状況適合性の規則とは、「自分の行為のある部分がそこに居合わせたすべての人々に知覚されていると半ば意識すると、それが公共的な意義をもつことを自覚して、適切と思われる形に修正しようとする」(Goffman,1963a:33=1980:37-38)感覚から生ずる規則であると述べておくことができる。どのような状況――それは友人同士の語らいの場であっても、電車や路上といった「公共の場」であってもかまわない[2)]――に参加するにしろ、他者と居合わせることは、自らの行動が他者に見られていることを意味しており、我々はそうした他者の視線に合わせて、自らの行動を律さなければならない。他者と居合わせた瞬間からそこには状況適合性の規則が作動し始め、それはその相互行為が終わる瞬間まで片時も途切れることなく作動し続けるのである。

したがって、相互行為の秩序の解明を眼目とするゴフマン社会学の最重要課題として、こうした状況適合性の規則の記述が浮かび上がることになり、ゴフマンの議論の大半は、「我々は日常的な対面的状況において、どのように自分たちの行動を状況に適合させているか？」という点を記述したものであると言ってよい。

鮮烈なデビュー作となった『行為と演技』においてゴフマンは、周知の通り「パフォーマンス(performance)」といった概念を中心として、相互行為をドラマトゥルギカルな視点から考察している。しかし彼の関心は、決して相互行為の演劇的な特質にあったわけではなく、また相互行為を一つの演劇として論じることに、彼が特別な意義を見出していたわけでもない。彼の関心は、あくまでも我々が他者と居合わせる時にして良いこと、してはならないことの解明にあったのであり、このことは彼自身による以下のような言明に端的に現れている。

> したがってここで、舞台の用語と仮面は拗棄される。……この報告の関心事は、日常生活に忍び込んでいる劇場的側面ではない。この報告の関心事は、社会的出会いの構造――社会生活において、人々が互いに直接肉体をもったものとして人前に出たときに存在し始めるようなさまざまの事象の構造――である。(Goffman,1959→1990:246=197

4:300、傍点は筆者による)

つまりゴフマンの関心は、当初から我々はどのようにして自分たちの行動を状況に適合させているのか、という点にあったのである。この点に関しては、彼が「舞台の用語と仮面」を「拗棄」して以降好んで用いた「関与(involvement)」の概念にしても同様である。

しかしここで一つ考えてみなければならないことがある。それは、相互行為の秩序が状況適合性の規則の遵守にかかっており、そして状況適合性の規則が他者に自分の行動が見られているという感覚から生じるにしても、そもそもなぜ我々は、状況適合性の規則に従うことができるのか、という問題である。確かに我々は他者の視線を感じたとき、自分の振る舞いを意識的にであれ無意識的にであれ、統制する。しかし、他者に見られているという感覚、つまり他者の視線という圧力は、自分の振る舞いを統制しなければならないという義務感を喚起するにしても、では具体的にどのように統制すればよいのかという点については、実は何一つ語っていないのである。

だとすれば、我々が大概の相互行為において、問題なく状況適合性の規則に従うことができているのはなぜなのであろうか。そこには「おそらく他者は私にこうして欲しいと望んでいるであろう」という、他者の期待に対する想像の働きが関与しているはずであり、更に言えば、そうした想像を可能にするものとして、自己と他者との間に「妥当なもの」として共有されている何らかの「信念」が介在しているはずである。

では、相互行為の秩序の背後にあるこうした信念は、一体いかなるものなのであろうか。ゴフマンはこうした問題にも目を配りつつ、相互行為の秩序の理論を「相互行為儀礼」論として結実させる。

4. 儀礼としての相互行為

相互行為に際して我々が行動の統制をミスし、あるべきはずの相互行為の流れが攪乱されたとき、我々は羞恥したり当惑したり狼狽したりする。そして我々がそうした感情を持つとき、そこにあるのは「面子(face)」の問題であるとゴフマンは指摘する。我々は「自分の面子を特別なもの」と考えており、しかも面子に関して「直ちに情動的反応を懐く傾向をもつ」(Goffman, 1967→1982:6=1986:2)。相互行為に際して我々は、自分の面子はもちろん、他者の面子も保つように厳格に要求されており、こうした規範を破る者には、「恥知らず」や「心が冷たい」といった否定的な評価が下される(Goffman,1967→1982:11=1986:5-7)。面子には我々の感情が密接に結びついており、面子の保持をめぐる規範は「道徳的」なものでさえあるのだ。

それにしても、なぜ我々はこれほどに自己や他者の面子の問題に敏感であり、また敏感であらねばならないのか。こうした点を考えていく中で浮かび上がってくるのが、デュルケミアンとしてのゴフマンの姿なのである。意外に思われるかもしれないが、ゴフマンは

社会学ばかりでなく人類学にも深く傾倒しており、特に彼の心を捉えたのがデュルケムとラドクリフ＝ブラウンであった[3]。とりわけゴフマンは、デュルケムが指摘した「聖なるもの」としての人格の概念から多くの示唆を受けており、彼の相互行為論を展望する上で、この点を確認しておくのは極めて重要である。では、ゴフマンに大きな影響を与えたデュルケムの知見とは、どのようなものだったのだろうか。

周知の通りデュルケムは、晩年の大著、『宗教生活の原初形態』において、オーストラリアの氏族社会の構造について古典的な知見を示した。そこでは聖なるものとしての「トーテム」を中心として諸種の儀礼が執り行われ、人々の社会生活が聖なるものをめぐる宗教表象によって営まれていることをデュルケムは指摘している。そして、そうした社会の成員は、様々な儀礼を通して自分たちをトーテムの子孫であるとイメージしており、それ故、自分たち自身もまた、程度においては劣るものの、しかしトーテムと同様の資格において聖なるものであると考えているのであった。

そして、我々が生活しているような近代社会においても根底のところでは事情は変わらないとデュルケムは主張する。近代社会は「分業」化が極限まで進んだ社会である。そして分業が進展すればするほど人々はそれぞれに異なった意識内容をもつようになり、人々の間に共有される要素はますます少なくなっていく。ついには、「全成員のあいだに、すべてが人間であるということ以外にもはや共通の要素が何一つ共有されないような時期がやってくる」(Durkheim, 1897=1985:425)。すると、人間であるということ、すなわち人格は、「集合的に追求されうる唯一の目的」として尋常ならざる価値を認められるようになり、「こうして人格は、ありとあらゆる人間的な目的をこえて、一つの宗教的な性質をおびるようになる」(Durkheim, 1897=1985:425)のである。よって、近代社会もまた、「人格」という聖なるものを中心にして構成されることとなる。したがってデュルケムは、以下のようにも指摘する。

> 個人こそがある種の宗教の対象となる。われわれは、人格の尊厳のために、ある礼拝式をもつ。(Durkheim,1893=1971:167)。

しかしその「礼拝式」は、具体的にはどのような行動を指すのか。残念ながら、デュルケム自身はこうした点について何一つ語っていない。

そして、こうしたデュルケムの指摘を自らの議論に取り込んだのが、実はゴフマンなのである。つまりゴフマンは、相互行為に際して成員たちに共有されている信念を、デュルケムが指摘する「人間の人格は神聖なものである」(Durkheim,1924=1985:55)という理念に見出す。面子は、そうした「聖なるものとしての人格」の尊さを象徴したものであるというのである。そして、デュルケムがその存在を暗示しながらも自らは議論しなかった、聖なるものとしての人格をめぐる「礼拝式」が、相互行為場面における、面子をめぐる道

徳的な行動の形で見出されると指摘する。

> 人間の面子は神聖なものであり、したがって、それを維持するために要求される表現手続きは儀式的なものである。(Goffman,1967→1982:19=1986:15)

そしてこうした点について、ゴフマンは「敬意(deference)」の概念を用いながら、更に詳細に分析を行っている。「敬意」とは、「ある相手に対し、その相手本人、または、その相手がその象徴、延長、あるいは代理物とみなされるような、あるものに対する自分の評価を適切に伝えるための象徴的手段」であり、また「行為者が受容者との関係を祝い、確認する方法」である(Goffman,1967→1982:56-57=1986:5)。そしてゴフマンによると、敬意には二つの形態が見られるという。

まず第一に、個人はそれぞれ、自己の身体およびその周辺に、「自己領域(self territory)」と呼ばれる、他者の接触や侵入を許さないある種の聖域のようなものをもっている。相互行為に際してむやみに体を触ったり、あるいは過剰に身体的に近接したり、必要以上に視線を向けたりすることは、そうした聖域を汚す冒涜的な行動である。よってある種の敬意は、相手の自己領域を尊重し、それから距離をとる、というふうにして示されることになる。これが敬意の「回避的儀式(avoidance ritual)」と呼ばれるものである。

第二に、敬意は、例えば何らかの挨拶の言葉や動作のように、ある人物が他の人物に対して積極的に関わるようにして示されることもある。それは、「『気づく』ということに関する慣行」(Goffman,1967→1982:71=1986:67)であり、他者の何らかの行動に対して敏感に賞賛や激励を与えることなどが例としてあげられる。これが敬意の第二の形態で、敬意の「提示的儀式(presentational ritual)」と呼ばれるものである。

そしてゴフマンは、以上のような敬意の二つの形態について、「われわれには、この区別は、儀式を積極的なものと消極的なものに二分するデュルケムの分類いらい、おなじみである」(Goffman,1967→1982:73=1986:69)と述べるとともに、こうした相互行為儀礼論について、「デュルケムの社会心理学の近代的な新解釈」(Goffman,1967→1982:47=1986:42-43)と形容している。ゴフマンがいかにデュルケムから大きな影響を受けているかは明白であろう。

以上のように、相互行為の秩序の解明を眼目とするゴフマンは、状況適合性の規則の背後で成員間に共有されている信念を、デュルケムが指摘する聖なるものとしての人格というものに見出し、面子や敬意の概念のもとに相互行為儀礼論として結実させた。もちろん、成員間に共有されている信念は聖なるものとしての人格というものに尽きるわけではないし、この点については後に触れることにするが、対面的に関係することによって生起する知覚上の相互浸透、それによって要請される状況適合性の規則、そしてそうした規則の背後にある社会的な信念の問題を論じたという点において、ゴフマン社会学は相互行為儀礼

論をもって一定の理論的完成をみたと考えてよいだろう。

5. 相互行為儀礼論の陥穽

しかし、ゴフマンの相互行為儀礼論とデュルケムの議論とをもう少し慎重に比較してみると、そこには重大な差異が存在することに気づく。一言で言えばそれは「儀礼」と「宗教的信念」をめぐる問題であり、より一般化した言い方をすれば、「信念」や「規範」と「行為」との関連性の問題である。この点を検討するために、今一度『宗教生活の原初形態』におけるデュルケムの議論を簡単に検討しておこう。

まずデュルケムは、宗教現象の本質を聖なるものの存在に見出し、聖なるものに象徴されるような「宗教的信念」の問題を論じている。デュルケムはそこで、聖なるものをめぐる信念が、オーストラリアの先住民社会においてはトーテムという形態をとって顕現しており、そして彼らの社会生活においてトーテムがいかに決定的な役割を果たしているのかを明らかにした。次いでデュルケムは、そうした信念と表裏一体のものとなっている「儀礼」の問題を考察する。まず第一に、トーテムとされている動植物やトーテムが描かれた「チュリンガ」は聖なるものであるから、それを食したりむやみに眺めたり触ったりといった行動は厳格に禁じられている。このような、聖なるものとの間に距離をとるような行動が「消極的礼拝」であり、それは諸々の禁忌となって現れる。

しかし、いかに「聖物とは、禁止が保護し孤立させるものである」(Durkheim,1912=1975上:77)とは言っても、聖と俗とが完全に切り離されてしまっては元も子もない。なぜなら、「俗が聖となんらの関係をもちえなかったら、聖は何の役にも立たない」(Durkheim,1912=1975上:76)からである。更に言えば、「消極的礼拝はその存在理由を自らの中にもってはいない。それは宗教生活へは誘うが、この生活を構成するというよりは、むしろ、これを前提としている」(Durkheim,1912=1975下:165)。なぜなら、「それが間接的に積極的な効果をもっているにしても」、消極的礼拝は聖なるものの存在を前提としてはじめて要請されるものであり、聖性の信念自体を産出することはないからである。よってデュルケムは、消極的礼拝の考察に続いて、「宗教力と双務的な積極的関係」(Durkheim,1912=1975下:165)を取り結び、聖性の信念を生み出すような儀礼の諸類型について論じることになる。それが「積極的礼拝」である。

積極的礼拝には、「供儀」や「模擬的儀礼」をはじめとして、いくつかの下部類型が指摘されるが、それらはいずれも、究極的には聖性の信念の源泉である「集合的沸騰」を惹起することを目的としている。トーテミズムは氏族を単位として構成される宗教体系だが、だからといって人々は常に氏族単位で生活を送っているわけではない。人々は通常、小集団に分散して、狩猟、漁労などに従事し、食料を得るための経済生活を送っている。生物的欲求の充足に追われるこの経済生活主体の生活は世俗的なものであり、また、小集団に分散したこの状態は熱気に欠け、沈滞した生気の乏しいものである。

ところが、分散して経済生活に追われている小集団は、周期的に数日あるいは数カ月の間、例えば供儀や模擬的儀礼を挙行するために氏族単位で凝集する。そして通常は分散した小集団生活を送っている氏族の成員にとって、この非日常的な凝集状態は特異な意味を持つ。つまり、「集中していることそれ自体が例外的に強力な興奮剤として働く」(Durkheim, 1912=1975 上:389)ことになるのである。氏族的凝集という興奮剤は、尋常ならざる情緒的激昂をもたらし、それは激しい身体的運動ともなって表出される。更にこうして醸し出される一種独特の雰囲気が、一層の情緒的激昂を相乗的に引き起こしていくことになる。そして、こうした常軌を逸した激昂が、俗なる日常とははっきりと区別されるもの、すなわち聖なるものの信念を成員の精神に焼きつけるのである。

つまり、儀礼は聖なるものの信念に導かれてなされるものであると同時に、聖なるものの信念はほかならぬ儀礼によって生成されるのである。もちろん、聖なるものの信念は様々な信念の一例であり、儀礼は様々な行為の一例であるが、そうした特殊性を一般化して表現し直せば、以下のようになる。つまりデュルケムは、信念（規範）と行為との、相互補完的・相互反映的な関連性を『宗教生活の原初形態』において解明していたのだ。

こうしたデュルケムの議論とゴフマンの相互行為儀礼論とを比較してみると、ある重大な事実に気づく。ゴフマンはデュルケムの指摘した聖なるものとしての人格の概念を面子の概念に翻案し、そしてデュルケムの言う積極的礼拝と消極的礼拝をそれぞれ提示的儀式と回避的儀式に置き換えることで相互行為儀礼論を展開しているものの、面子に象徴される人格の聖性の信念を所与のものとしてしまっており、そうした信念がどのように生成されているのかという点については、何も説明していないのである。その意味では、土井が指摘するように、いかに提示的儀式というものが挨拶や激励などといった「積極的」な行動を伴っているにせよ、ゴフマンの扱ったものは実は消極的礼拝のみであった、と言えるであろう(土井,1994:10)。この点で土井はゴフマンを批判しているが、相互行為儀礼論に関する限り、この土井の指摘は全く正しい。

だが、時を経るにつれて、ゴフマン自身もこうした陥穽を強く意識するようになり、儀礼概念を再構成した上で対面的行動を論じるに至っているように思われる。こうしたゴフマンの試みを次に検討してみよう。

6. 儀礼概念の再構成と「制度的再帰性」の概念

ゴフマンは1982年に他界しているが、1970年代の後半以降ゴフマンは、ジェンダー論的な主題、すなわち男らしさや女らしさに関する「信念(belief)」と「実践(practice)」の問題を論じながら、儀礼概念の再構成も絡めつつ興味深い知見を示している。

まずゴフマンは、儀礼というものは、互いに行為し合う人々の間や会衆の中で行われるものであるという事実に着目する。つまり儀礼は、「社会的状況(social situation)」すなわち「集まり(gathering)」において挙行されるのである。よって儀礼の素材となるものは

対面的状況の中に存在する(Goffman,1979:1)。

そしてデュルケムが扱ったものは、こうした「儀礼化(ritualization)」の中の一つであるとゴフマンは指摘し、「ディスプレイ(display)」という概念を導入する。ディスプレイは、集まりにおける行為者の「調整(alignment)」、すなわち社会的状況内でこれから起ころうとしている出来事の中で、行為者が引き受けようとする地位の証拠を与えるもの、と定義されるものであり、ディスプレイを行う人とそれを知覚する人との間の接触の条件や、やりとりの様式などを確立するものである(Goffman,1979:1-2)。

ところで、新たにディスプレイという概念を導入しているとはいえ、一見するとゴフマンはここで、相互行為儀礼論において展開した、「聖なるもの」としての人格や面子に対して執り行われる儀礼や、そうした儀礼を通して維持される相互行為の秩序の構造についての議論を反復しているに過ぎないように思われるかもしれない。

しかしゴフマンが、儀礼は常に成員の物理的近接の中で執り行われること、そうであるが故に儀礼の要素はすべて対面的状況の中に存在するとわざわざ言明していることに注目する必要がある。なぜならその言明は、儀礼と呼ばれる行動はもちろん、そうした行動を導き、そうした行動によって再生産されるような信念もまた、対面的状況に見出されることを意味しているからである。

要するにゴフマンは、ディスプレイという概念を導入し、対面的状況内での行為者の具体的な行動の分析にあたることによって、デュルケムが示した信念と行為との相互補完的な図式が、自らが対象とするような対面的状況にいかに見出されるのか、という点に考察の焦点を当てているのである。「実践(practice)」は「信念(belief)」を指し示し、信念は、実践が行為者によって自明のものとして処理されていく過程の中でその妥当性を維持し再生産されていく――ゴフマンが「性別間の配置」と題する論文(Goffman,1977)で提示した「制度的再帰性(institutional reflexivity)」[4]という概念は、こうしたメカニズムを意味している。またこの概念は、デュルケムの理論全般において稀薄であった行為論的な視座――だからこそデュルケムは、「礼拝式」の存在を指摘しながらも具体的な礼拝活動については言及しなかったのではないか――を補うものであるとも言えるだろう。

そしてゴフマンは、こうした再帰的なメカニズムを持つものとして儀礼概念を再構成しているのである。この点について、ゴフマンは以下のように述べている。

> また私は、ある種の制度的再帰性についても強調しておいた。そこで論じたことは、根深い制度的な実践は、社会的状況を両性によるジェンダリズムのパフォーマンスの場面へと変容させるということ、そしてこうしたパフォーマンスの多くは、……二つの性別の異なった人間性についての信念を確証する儀礼的な形態をとっている、ということである。よって、こうした儀礼の政治学について考えてみる必要があるのだ。

(Goffman, 1977:325、傍点は筆者による)

つまり実践は、信念を身体的行動として具現化するものであると同時に、そうした具現化自体を通して信念を再生産していくのであり、対面的相互行為は、そうしたメカニズムが知覚上の相互浸透のもとに成員たちの間で儀礼として作動する現場なのである。対面的な経験が成員たちによって自明のものとして処理されていく過程は、そこで参照されている信念が、自明なもの、妥当なものとして再生産されていく過程そのものなのだ。

したがって相互行為という場は、その一見したところ自明で平穏な外見とは裏腹に、大変に厳格で過酷な一面をも持ち合わせている。というのは、上に述べたような再生産の図式は、我々の社会的経験の成就を自明なものとして保証するメカニズムに他ならない以上、相互行為の場においてそうした自明性に抵触するような振る舞いをする者には、我々の社会生活を脅かす者として「有罪」の裁定が下されることを意味しているからである。例えばゴフマンは、精神病者と呼ばれる人々について以下のような指摘をしている。

> 法的秩序を乱すものが刑務所に拘留されるのと同様に、不適切な行為をする者は精神病院に収容される。前者は我々の生命と財産を守るための施設であり、後者は我々の集まりと社会的場面を守るための施設である。(Goffman,1963a:248=1980:267)

こうして我々の相互行為を脅かす者は「アサイラム(asylum)」に隔離されていくのである。そしてこうした「審判」の図式は、スティグマの問題にも見出すことができるだろう。逆に言えば、精神病やスティグマといった問題は、我々が自明視している信念を逆照射していると考えることもできる。日常的な相互行為の秩序の考察を研究主題としたゴフマンが、頻繁に精神病について言及したり、スティグマについて著書をものしたりした理由も、こうした点にあったと言えるのではないだろうか。そしてこのように考えてみるならば、様々な概念やトピックが縦横に飛び交い、それぞれの著作の間の関連性も分かりにくいと言われるゴフマンの思考が、その複雑な外面とは裏腹に、実は極めて一貫したものであったことをも、同時に理解することができるはずである。

7. 結語

ゴフマンは、成員たちのナマの感覚による直接的な相互知覚という特質に注目することによって、信念や規範の作動を可視的な行動のレベルで見出すことに成功するとともに、制度的再帰性の概念や儀礼概念の再構成によって信念や規範と行為との相互補完的・相互反映的な関連性をも理論化していた。ゴフマンが行った相互行為の秩序の考察は、こうした図式を我々に提供してくれる。

そしてこうした図式を通して、我々は自分たちが日常的に経験している相互行為という

関係性が、我々の社会生活に何を帰結しているのか、という点について多くのことを知ることができるはずである。先ほども述べたように、相互行為という場は、我々一人一人が自明のものとして状況に持ち込んでいる信念が、そうした信念に基づいた行動によって再生産される場であり、成員たちが相互に、相手がそうした信念を支持している者であるかどうかを裁定する審判の場なのだ[5]。そこで我々は、自分たちの一挙手一投足をも互いに裁きあっているのである。

ところで、既に述べたようにゴフマンは、著書の中で頻繁に精神病者について言及している。また、周知の通りゴフマンは、様々な対面的関係性の中でもとりわけ「公共」的なものに関心を向けている。だとすれば、精神病者を不適切な振る舞いをする者として排除し[6]、「公共空間」においては「市民的無関心(civil inattention)」[7]によって関係し合うことを要請するような、こう言ってよければ「市民的・公共的信念」は、様々な信念の中でも我々のメンタリティを特に色濃く反映していると見ることができるだろう。そしてこのように考えてみるならば、そうした市民的・公共的信念の歴史的な生成と変遷の過程の解明に取り組むことが、次なる課題の一つとして浮上してくることになる。

こうした作業は、まず理論的には相互行為分析と歴史分析との接合という課題を伴うものである。また、こうした作業の重要な手だてとなる、例えばエリアスやフーコーといった論者の議論は、西洋（正確には西欧）に特殊な歴史的背景と表裏一体となったものであるから、そうした歴史的・文化的特殊性から切り離して一般的な図式として使用できる部分とそうでない部分とを、我が国の具体的な歴史的事実と突き合わせて吟味しなければならないという、歴史学的な課題をも伴うものである。したがってもちろん、こうした作業は決して容易なものではない。

しかしこうした作業に取り組むことによって我々は、市民的・公共的信念を自明のものとするような我々という存在がどのような歴史的・社会的背景から生まれてきたのか、そしてそうした信念を自明のものとして処理しているような我々の日常的な関係性は、今後何を生み出していくのかという点を問うための、重要な足がかりを築くことができる。そしてこうした作業は、対面的に関係し合う人々の具体的な経験に埋没することによっても、そうした経験を無視することによっても決して達成され得ないのであり、ゴフマンの理論はこうしたことをも我々に示唆しているのである[8]。

【註】

1) ゴフマンの理論には、ジンメルやシュッツからの影響を思わせる箇所がいくつかあり、もちろんこうした点を検討することはゴフマンの理論を理解する上で重要なものである。しかし本稿ではそうした検討にあたるための紙幅の余裕がないので、今後の課題としておきたい。

2) 「かまわない」という意味は、「公共空間」と「私秘空間」のどちらにおいても状況適合性の

規則の遵守を要求されるという点は変わらないということであって、それ以上のことを意味するつもりはない。というのは、公共空間と私秘空間とでは、例えば「市民的無関心」の有無を筆頭に、明らかに異なった行動原則が要求されているからである。また、見知らぬ他人同士が市民的無関心によって平和に近接するという、ゴフマンが言う意味での公共的な空間や関係性は、決して歴史的・文化的に普遍的なものではない。したがって、こうした空間や関係性の誕生自体を問うという作業も不可欠であり、私は 1998 年に関西学院大学で開催された日本社会学会での報告で、「ゴッフマン的空間の系譜」という題目のもとに、こうした点について考察している。それをもとにしつつ、近々こうした論点についても稿を起こすことになるだろう。

3) 1945 年にカナダのトロント大学を卒業したゴフマンは、当時のアメリカ社会学の中央学府であったシカゴ大学の大学院に進んだ。当時のシカゴ大学では、1930 年代にラドクリフ=ブラウンが行った講義の影響から、人類学に対する関心が非常に高まっており、ゴフマンもその例に漏れず、社会学にとどまらず豊かな人類学的素養をもこの大学院生時代に身につけたという。またゴフマンは博士論文の執筆に際してシェットランド島でのフィールド・ワークに従事しているが、その際に籍を置いていたのはエディンバラ大学の社会人類学部であった(Burns, 1992:9-13)。更にゴフマンは、1971 年に刊行した『公共における関係』の冒頭で、「A.R.ラドクリフ=ブラウンの追憶に捧げる。1950 年、彼がエディンバラ大学を訪れたとき、私はもう少しのところで彼に会うことができたのだ。」という感動的な献辞を述べている。

4) ギデンズが近年のモダニティ論において、これと全く同じ「制度的再帰性(institutional reflexivity)」という語を用いているが、ゴフマンの言うそれは、対面的状況下における実践と信念との循環的な関係性を指摘した概念であり、モダニティという文脈に特化しているわけではないし、ギデンズが指摘するような、近代に特有な意味での社会生活の再帰的な特質をゴフマンが意識しているわけでもない。したがって言葉としては同じだが、両者の意味は全く異なる。

5) もちろん、そうした再生産の場は対面的状況のみに限定されるわけではない。例えばマス・メディアというものもまた、多分に儀礼的な機能を持つものであり、ゴフマンもジェンダー論に際しては、メディアによって伝達される様々な「広告(advertisement)」を分析の俎上にのせている。しかし、そうした広告で描かれているような男らしさや女らしさもまた、我々の日常的な対面的関係性におけるそれを指し示すものであり、更に言えば、いかにメディアが発達しようとも、対面的な関係性が消滅するわけではない。だとすれば、メディアというものが果たしている大きな役割をもって対面的関係性やその儀礼的特質を無視する論拠としてはならないであろう。

6) こうした排除については様々な知見が存在するが、少なくとも、いま現在行われているような——つまりアサイラムに排除していくような——排除の形態は、それほど普遍的なものとは言えない。例えばエリアスやギデンズは、近代以前の社会においては、精神病というカテゴリー自体が稀薄であったこと(Elias,1969a=1977:292)や、我々が精神病者と呼んでいるような人々が必ずしも排除の対象としては認識されていなかったこと(Giddens,1991:205)を指摘している。

7) この語は従来「儀礼的無関心」と訳されてきたが、ゴフマンはこの行動を都市的な公共空間に

特有の行動として挙げており、またギデンズなどは、「《儀礼的無関心》は、モダニティという規模の大きな匿名的状況のもとでの信頼関係の根本的側面をなしている」(Giddens, 1990=1993:112)などと述べて、その近代的な性質を強調している。以上のような点と、'civil'という語の最も一般的な意味合いとを考えあわせてみると、奥村がするように「市民的無関心」とした方が妥当だと思われる。また奥村は、この「市民的無関心」の概念などを軸にして、「市民社会」の関係の特質について興味深い考察を行っている(奥村, 1998:165-215)。

8) こうした問題意識のもと、私は既にゴフマンの相互行為論を近代という時代の一側面を描いたものとして捉え直す作業を試みている。拙稿(櫻井, 1997)を参照していただければ幸いである。

【主要参考文献】

Burns,T. 1993 *Erving Goffman*,Routledge.

Collins,R. 1994 *Four Sociological Traditions*, Oxford University Press.=友枝敏雄他訳 1997 『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』、有斐閣。

土井文博 1994 「道徳共同体論による社会分析のあり方」、『社会学評論』45(3):2-17、日本社会学会。

Durkheim,E. 1893 *De la Division du Travail Social.*=田原音和訳 1971 『社会分業論』、青木書店。

———. 1897 *Le Suicide*=宮島喬訳 1985 『自殺論』、中央公論社。

———. 1912 *Les Formes Élémentaires de la Vie Religieuse.*=古野清人訳 1975 『宗教生活の原初形態』（上・下）、岩波書店。

———. 1924 *Sociologie et Philosophie*, Félix Alcan. =佐々木交賢訳 1985 『社会学と哲学』、恒星社厚生閣。

Elias,N. 1969a *Über den Prozess der Zivilisation*, Francke Verlag.=池田節夫他訳 1977,1978 『文明化の過程』（上・下）、法政大学出版局。

Giddens,A. 1987 "Goffman as a Systematic Social Theorist", *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press.=草柳千早訳 1998 「体系的社会理論家としてのアーヴィン・ゴフマン」、藤田弘夫監訳 『社会理論と現代社会学』:151-192、青木書店。

———. 1990 *The Consequences of Modernity*, Polity Press.=松尾精文・小幡敏文訳 1993 『近代とはいかなる時代か？』、而立書房。

———. 1991 *Modernity and Self-Identity*, Stanford University Press.

Goffman,E. 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company.→1990 Penguin Books.=石黒毅訳 1974 『行為と演技』、誠信書房。

———. 1961a *Encounters*, The Bobbs-Merril Company.→1972 Allen Lane Penguin Press.=佐藤毅・折橋徹彦訳 1985 『出会い』、誠信書房。

———. 1961b *Asylums*, Doubleday & Company.→1991 Penguin Books.=石黒毅訳 1984 『アサイラム』、誠信書房。

———. 1963a *Behavior in Public Places*, The Free Press.=丸木恵佑・本名信行訳 1980 『集まりの構造』、誠信書房。

———. 1963b *Stigma*, Prentice Hall→1990 Penguin Books.=石黒毅訳 1987 『スティグマの社会学』、せりか書房。

———. 1967 *Interaction Ritual*, Doubleday & Company.→1982 Random House.=広瀬英彦・安江孝司訳 1986 『儀礼としての相互行為』、法政大学出版局。

——— 1969 *Strategic Interaction*, University of Pennsylvania Press.

———. 1971 *Relations in Public*, Allen Lane Penguin Press.

———. 1974 *Frame Analysis*, Haper & Row.→1986 Northeastern University Press.

———. 1977 "The Arrangement Between the Sexes", *Theory & Society*.4(3):301-331.

———. 1979 *Gender Advertisement*, Haper & Row.

———. 1983 "The Interaction Order", *American Sociological Review*48(1):1-17.=椎野信雄訳 1992, 1993 「E.ゴフマンの『相互行為秩序』を読む（第一部）」（その一、その二）、『人文学報』232:105-123、241:119-147、東京都立大学人文学部。

宮坂敬造 1985 「儀礼におおわれた対人的相互作用」、『現代社会学』19-11（1）:64-104、アカデミア出版会。

奥村隆 1998 『他者といる技法』、日本評論社。

櫻井龍彦 1997 「ゴッフマンにおけるモダニティの問題」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』46:15-22。

椎野信雄 1991 「ドラマトゥルギィから相互行為秩序へ」、安川一編 『ゴフマン世界の再構成』:33-64、世界思想社。

安川一 1991 「＜共在＞というポルノグラフィ」、安川一編 『ゴフマン世界の再構成』:185-210、世界思想社。

（さくらい　たつひこ　慶應義塾大学大学院社会学研究科）